



第4章 柿原政一郎とその家族

1.妻

柿原政一郎は明治43年12月27日、高鍋出身の福崎マサと結婚しました。ふたりの間には、長男正明、二男幸二、三男正平、長女てつ、次女みちが誕生しました。しかし、正明と正平は夭折しました。

2.子女・子息

長女てつは明治44年(1911)10月18日、湯風呂の本宅で生まれました。宮崎県高等女学校、東京女子大学国文科を卒業。竹本孫一と結婚しました。

二女みちは大正2年(1913)8月8日、高鍋町小丸の社宅で生まれました。東京女子大学を卒業。長津久男と結婚しました。ふたりの間には長女・俊子、次女・典子、三女・弘子があります。

二男幸二は大正5年(1916)11月9日、岡山市で生まれました。

長女てつによると「幸二は子供のときは神童といわれた」といいます。しかし立身出世主義をきらい、芸術や文学を好みましたが、生涯にわたる専門

としては自然科学の研究者の道を選びました。

小学 6 年で東京に移り駕籠町小学校に転校し、昭和八年に東京府立第五中学に入学。第一高等学校を経て、東京帝国大学理学部化学科に進学。昭和 16 年、東大を卒業し、東京芝浦電気株式会社に入社。原子核工学を専門としました。太平洋戦争勃発時で、電波兵器（レーダー）の開発に従事しました。終戦後は、原子力平和利用が叫ばれ、昭和 30 年に日本原子力研究所が設立されると建設段階から参加。第一号原子炉の運転管理の責任者に抜擢されました。昭和 22 年 5 月、中島美代と結婚。

昭和 32 年第一号原子炉が完成すると、「毎日が思いがけない新事実との遭遇で、どんな教科書をみても何も書いていないことの連続で、原理にさかのぼって究明しないと何もわからなかった」といいます。悪戦苦闘の 5 年を過ごし、「原子炉のベテラン」の評価を受けます。

このころ昭和天皇の皇太子が原子力研究所を訪れ、幸二が説明役を担いました。テレビでも放映されたのを見た父・政一郎は大喜びしました。

昭和 46 年、55 歳で定年退職すると、原子力サービスのための会社・東京ニュークリアー株式会社を設立し社長に就任。従業員二百人を超える技術専門企業に成長させました。後進に

道を譲り相談役に就任。

昭和 60 年、父・政一郎が設立した高島産業株式会社の社長に就任。同社は、広島市を拠点として、自動車学校、不動産賃貸業、宮崎での緑茶の製造・販売を主な事業としました。幸二は「父の長男というだけで、何の能力もない。何とかこの社長を引き受けているが、こんな不適任はないと思う」と謙遜しています。

科学的才能に恵まれ、草創期の日本原子力分野の中心的存在でした。文化芸術にも興味を持ち、博学多才でしたが、自己の才能を誇らず、謙虚な人柄でした。昭和 63 年 1 月、脳梗塞を発症して入院。療養生活を送りました。平成 8 年 7 月 28 日鎌倉の病院で死去。享年 80 才。

あとがき

本年は柿原政一郎が亡くなって六十五年目に当たります。また来年が正幸会設立八十周年になります。

児童福祉の父・石井十次に師事した柿原政一郎は、世の中の不平等を痛感しました。実業家・大原孫三郎の秘書としても働いた政一郎は、搾取することなく利益を社会に還元する資本主義も学びました。

終戦後の混乱した時代に二期にわ

たり高鍋町長を無給で勤め、財政を立て直す一方で、文化の中心となる図書館を自費と正幸会の寄付により建設し、高鍋町に寄付するという足跡を残しました。

こうして社会正義を生き方の中心に捉えながら、強い郷土愛を持ち、郷土文化の向上にも尽力しました。

柿原政一郎の一生は、社会正義と郷土愛から来る奉仕の生き方を貫いたものと言えるでしょう。高鍋町に最も貢献した政治家であり社会事業家であるとの評価は間違いないところです。柿原政一郎の足跡をたどりながら、彼の全貌に迫ろうとしましたが、はたして初期の目的を達成できたか否かについては、読者の方々の判断にお任せします。

本稿の内容は「柿原政一郎」（荒川如矢郎著）に拠るところが多く、また政一郎の父・正一については「柿原正一」（竹本哲子著）に拠ったものです。そのほか、公表された資料を参考にしました。資料の著者ならびに関係者の皆さんに感謝の意を表します。

（終）

参考資料

「柿原政一郎」 荒川如矢郎著 柿原政一郎翁顕彰会

「柿原正一」 竹本哲子著 財団法人正幸会

「夕映え一余白の日々」 竹本哲子著 日本之薔薇出版社

「石井十次」柿原政一郎著 日向文庫刊行会

「柿原幸二日記」柿原幸二著 財団法人正幸会

「郷土に生きる」尾崎一男著 高鍋信用金庫

令和8年8月

文責：石川正樹

発行：社会教育課 文化係